1　本研究の経過

I　はじめに

はじまったばかりの本研究であるが、その背景にはいくつかの事情がある。以下では現在までの経過を簡単に示して、本研究の問題関心の形成過程を素描しておくことにしたい。なお便宜上、以下では科学研究費の申請が採択される2002年4月までと、採択された以後にわけて記述する。

II　本研究が採択されるまでの経過

本研究参加者は、それぞれに外邦図に関する関心をふかめてきた。まず、こうした事情から紹介したい。

東北大学に勤務してきた田村（現立正大学）は、同大学所蔵の旧参謀本部の地形図類の整理過程で、とくに外邦図に対する関心を深め、その体系的研究の必要性を痛感してきた。また、オランダ、アムステルダム大学所蔵の旧オランダ領東インド（現インドネシア）の地形図（オランダ製）に、旧日本軍が押印しているものを発見し、外邦図の作製過程についてつよい関心をもつこととなった。あわせて、環境に関する情報の少ないアジア地域の第2次世界大戦前の地形・植生などを示す好資料として、外邦図がその変動の研究に大きな意義をもつことを発見し、インドネシアを例に利用を開始している（これらについては、本ニュースレター所収の報告を参照）。

また石原（京都大学）は、これまでのインド・中国における地方中心地の調査において、地域の一次情報としての外邦図の有用性を認識し、その作成過程に関心を持つと同時に、各種地図の探索を試みてきた。すでに作製から50年以上が経過しているところから、これらの図の歴史資料としての価値も重視し、その体系的保存と研究の必要性を感じてきた（これらについては、本ニュースレター所収の報告を参照）。

さらに久武（甲南大学）は、戦前の京都大学地理学教室を中心とする地政学グループの活動に関心を寄せ、関係者へのインタビューなどをおこなう過程で、同グループにも参謀本部より「軍事秘密」であった地図・海図が大量に供与されていたことを知り、外邦図の研究が必要なことを感じていた。またイタリア地理学会所蔵の日本関係地図（在ローマ）の調査を依頼され、そのなかに数十枚の旧満州国関係の都市図・作戦図を発見していた。

くわえて、かねてより地図史的関心から外邦図に関心を寄せ、第2次大戦中の旧日本軍占領地の各種地図（外邦図とその外国製原図をふくむ）を比較してきた長谷川（神戸大学）は、マドリッドでの国際地図学会(2001年7月)でその成果を発表したところ、関係国の研究者より、関係図の所蔵について情報をえた。なかでもブリティッシュ・ライブラリーには、かなり外邦図があり、その整理作業に協力することを勧められた。

これらに並行して、京都大学博物館で古地図類の整理・管理を担当していた佐藤（現九州大学）は、同館所蔵の戦前の地形図に関心を寄せ、その来歴の検討の必要性を痛感するほか、山近（防衛大学校）も防衛研究所所蔵のミクロネシアの外邦図の地名表記の特異性に留意していた。

また、地理学史の観点から兵要地誌（軍事用地誌）に関心を寄せてきた源(淑徳大学)も、関連情報として同様に軍事秘密とされていた外邦図の組織的研究の必要性を感じていた。

他方、未公開の状態がつづいてきた南西諸島の戦前の地形図（「軍事秘密」図を多く含む）に関心を寄せてきた小林（大阪大学）は、柏書房からこれが出版される（『大正昭和琉球列島地形図集成』1999年刊）のを機に、この所蔵者であるお茶の水女子大地理学教室に勤務されていた浅井辰郎先生に、収蔵の経過を問い合わせたところ、旧参謀本部より旧資源科学研究所にうつされた地図類の整理・配布を同先生が担当されてこられたことを知った。この経過は浅井

「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大に入ったか」として、上記地図集成の解題におさめられることとなった（pp. 23-26）。またこの出版に関連して、古地図研究者の清水靖夫氏も旧参謀本部の図を追跡していることがわかり、関連した情報の提供をうけた。さらに古地図出版に当たっている柏書房、科学書院の関係者からも情報の提供をいただいた。

浅井・清水両氏も旧参謀本部の地図類の全貌を明らかにするには、体系的・組織的研究が必要であるという点で一致し、この開始を強くすすめられた小林が、田村・久武に事情を話したところ、両者ともかねて同様のプランをもっていたことが判明し、本研究が構想された。そのごさらに、外邦図に関心を持っていた石原・長谷川・源の参加もえられることになった。また、以上のような旧日本軍作製の地図類に対する関心の高まりをふまえ要請したところ、栗原・内田（お茶の水女子大学）の参加を得た。

以上のように、本研究は期せずして一致した外邦図に対する関心を集約するものであるが、本研究ではその利用法の確立もめざしている。そのひとつは、外邦図の保存および利用の簡易化をはかる画像データベースの作製で、村山・宮澤（東北大学）が関心をよせている。他方、環境などの変化を追跡するには、以上の成果をふまえた、外邦図のデータおよび衛星画像データなどとの比較が課題となるが、これについては GIS により東南アジアの地域環境情報を検討してきた長澤（鳥取大学）が関心を寄せている。

なお、本研究に関連して、久武・石原・内田が「アジアにおける植民地形成と地図作成事業」という課題名で、国土地理協会の 2000 年度の助成をうけ、これによって、実質的な研究が開始された。

III　本研究開始後の経過

本研究の採択されたのち、2002 年 5 月 18 日に京都大学総合博物館地図室で、石原・久武・堤（大阪大学）・山村（京都大学）・今里（現大阪教育大学）・小林があつまり、研究の計画を検討する予備的会議をおこない、第 1 回研究会をお茶の水女子大でおこなうこととした。

（1）第 1 回研究会

2002 年 7 月 27 日～28 日、お茶の水女子大学文教育学部で開催され、以下のような発表がおこなわれた。浅井辰郎先生もご出席いただき、発表に対するコメントをいただいた。

〈7 月 27 日〉

1. 石原　潤（京都大）「外邦図は<使える>か?: 中国とインドの場合」

日本人研究者にとって、現在もなお地形図の使用が困難な中国とインド・バングラデシュをフィールドに、外邦図を研究資料としてつかった経験が紹介された。中国については①日本の参謀本部製「仮製 10 万分の 1 図」、②民国製 10 万分の 1 図、③日本の参謀本部製「正式 10 万分の 1 図」がおなじ場所について比較対照され、その特色が検討された。図幅の名称はおなじでも図郭がちがい、目録作製にあたって、どの地形図か注意を要することがよく理解できた。インド・バングラデシュについては、日本軍の複製は、原図にかなり忠実であること、記載内容（定期市の市日なども示す）から、ふつうの地形図をこえる研究資料としての価値を持つ場合があることが紹介された。

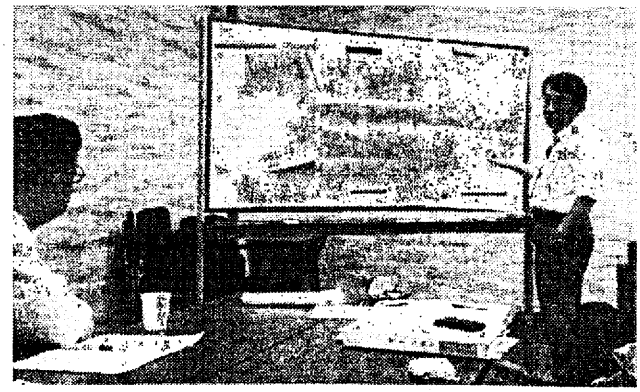

写真 1：中国・インドの外邦図を使用した説明

2. 久武哲也（甲南大）「旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学所蔵の外邦図の系譜関係について」

「帝国」と「地図作成」に関する海外の研究をまず紹介し、敗戦国である日本では外邦図の研究が空白になっていることが指摘された。つぎに旧資源研所蔵の図の配布にあたられた浅井先生の保存資料の検討結果が示され、大学所蔵の外邦図の概観をえた。浅井先生はじめ参加者から、さまざまなコメントがあり、大学所蔵の外邦図に関する展望がえられるとともに、共通理解ができあがった。また国会図書館の地図室整備に参加された清水先生から、同館のコレクションの整備には旧軍人の協力もあったことが紹介された。

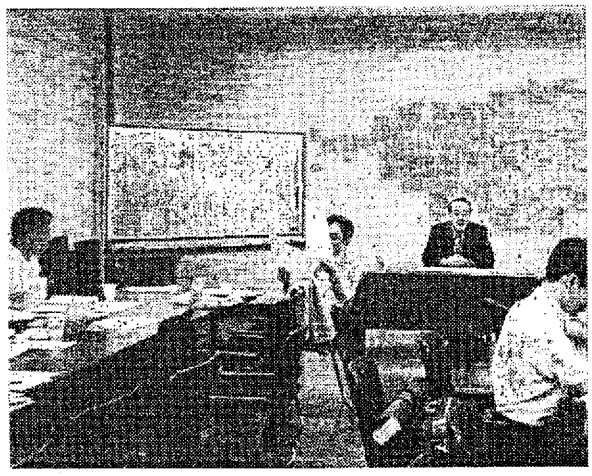

写真 2：久武氏による報告

3. 清水靖夫（法政大[非]）「外邦図の分類と定義」

一昨年（2001 年）国際日本文化研究センターで発表されたときの資料をもとに、「外邦図」の名称の由来、分類、さらにこれまで作製された目録類について紹介された。外邦図Ⅰ類は第 2 次大戦勃発以前に作製されたもの、同Ⅱ類は第 2 次大戦中に作製され、複製が多いことなど、今後の作業にあたって参考になる点が多かった。とくに議論となったのは、昭和 33 年に作製された外邦図の目録である。現在国土地理院に所蔵されているとのことで、この閲覧に努力することとなった。また、これに記載されている外邦図は現在防衛庁に保管されているとのことで、その閲覧も検討することとした。

写真 3：清水氏による報告

写真 4：コメントされる浅井先生

夜は茗荷谷駅地下の店で懇親会を開き、外邦図を素材に大いに議論が盛り上がった。

〈7 月 28 日〉

予定をはやめて集合し、お茶の水女子大学所蔵の外邦図コレクションを拝見した。コレクションの中には、兵要地誌図がはいっており、そのなかには「サンギヘ島」のように空中写真が刷り込まれたものもあり注目された。

写真 5:お茶の水女子大学所蔵外邦図の見学

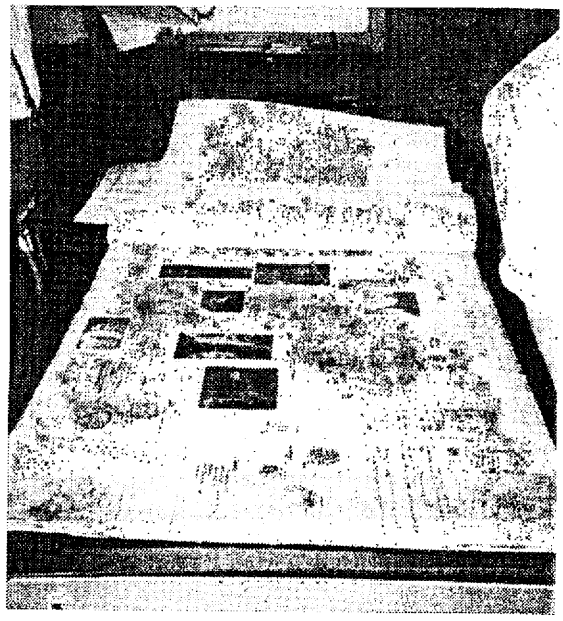

写真 6:空中写真をふくむ兵要地誌図

写真 7:お茶の水女子大学における
外邦図の所蔵状況

4. 渡辺信孝（仙台都市総合研究機構）「東北大学所蔵外邦図の整理およびその目録作成について」

大学所蔵の外邦図で、現在もっとも整備されている東北大学の地図の整理分類と目録の作成過程、それに関する留意点、さらには岐阜県の分布図センターの目録との関係などが紹介された。また東北大学の目録の CD も配布された。目録に記載すべき項目についても議論が発展し、今後の目録作成に大いに参考になる発表となった。

写真 8:渡辺氏による報告

5. 田村俊和（立正大）「地域環境資料としての外邦図の活用方法: ジャワ・バリの5万分の1地形図を例に」

外邦図の作製過程が紹介されるとともに、これまでの外邦図をつかった研究に言及され、とくにジャワの外邦図の特色と利用法が検討された。他国製の地図の複写にもいろいろな段階があること、さまざまな図を編集した場合もあることが紹介された。ジャワの地形図の場合、土地利用の分類が細かく、環境や土地利用変化の研究に有用なことが指摘された。またオランダの地図所蔵機関についても議論が発展したほか、オランダ製の地図をアメリカ軍が複製していることも指摘され、今後の地図の見方を考えるに際し、有用な情報が多かった。

写真9: 田村氏による報告

以上のあと、今後の研究のうち合わせをおこなった。これまでの外邦図に関する情報の整理にくわえ、兵要地誌図の購入（阪大）について報告したあと、下記のような今後の作業方針を決定した。

①在外外邦図調査

イギリス…大英図書館（長谷川、8月）。

アメリカ…議会図書館・アメリカ地理学協会・ハワイ大学（久武・今里、9月）。

②第二回研究会の開催　11月3日（日）に東北大学で開催。

③お茶の水女子大学などでの、外邦図の現物確認、目録整備。

④ニュースレターの作製

平成14年度末に、研究会の発表をもとにした報告をまとめ、発表者が寄稿して発刊する。

写真10: 研究会うちあわせ風景

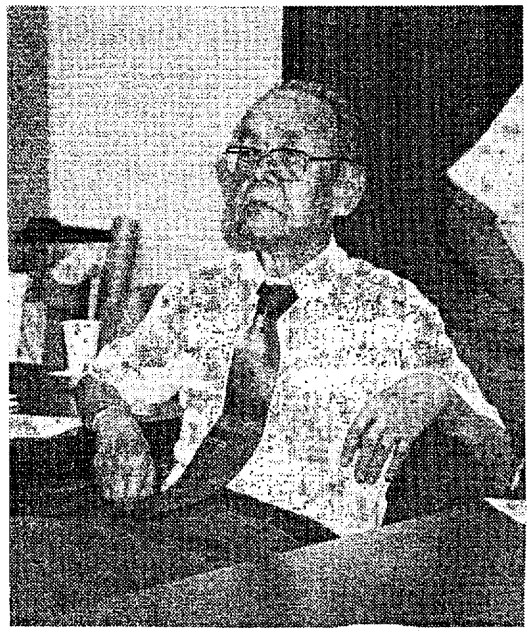

写真11: 連日参加された浅井先生

（2）第 2 回研究会

2002 年 11 月 3 日、東北大学理学研究科で開催された。研究発表は東北地理学会 2002 年度第 2 回研究集会をかねて、「外邦図の整備と関係資料の探索」を共通課題としておこなわれ、西村嘉助先生をはじめとする計約 40 名の参加があった。

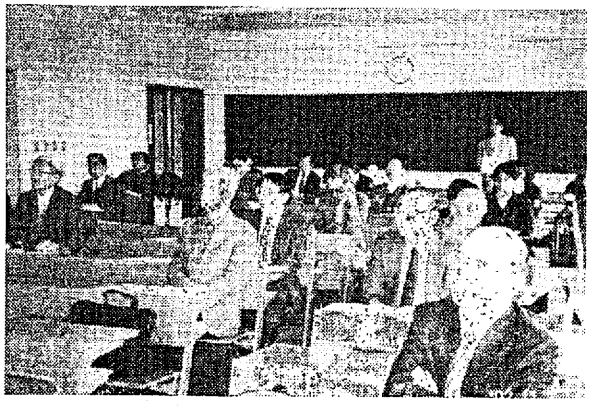

写真 12:スピーカーの長谷川氏(右端)と
西村嘉助先生ほか出席者の皆さん

1. 長谷川孝治（神戸大）「British Library 所蔵の外邦図について」

British Library（大英図書館）の現地調査にもとづく報告である。現在、国防省・英国公文書館から軍事地図の移管作業中で、外邦図もここに含まれていることがわかった。一例として、西伯利・極東・東ソ・満州・蒙古 10 万の兵要地誌図・地形図の索引図が、CD－ROM およびハードコピーとして提示された。また、インド 5 万・25 万の外邦図と原図との図式の対照から、外邦図では特に凡例が大幅に加筆され、なかでも水に関する情報が詳細であることが示された。

2. 今里悟之（大阪教育大）・久武哲也（甲南大）「在アメリカ外邦図の所蔵状況：議会図書館、AGS Golda Meir 図書館、ハワイ大学ハミルトン図書館の調査から」

アメリカ合衆国の 3 ヵ所の図書館の現地調査にもとづく報告である。まず、議会図書館（LC）および AGS 所蔵の外邦図について、その接収・収蔵

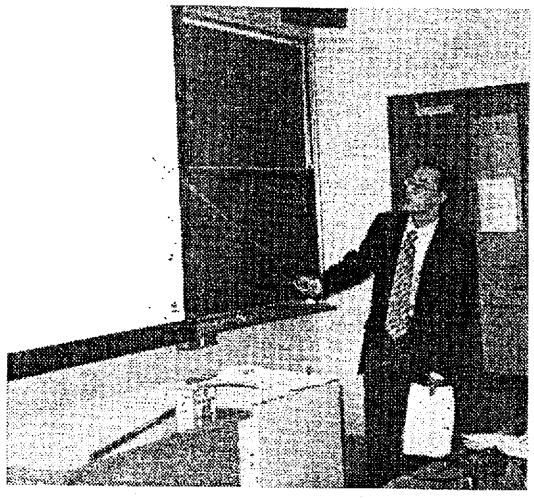

写真 13:今里による報告

経路と時期について報告がなされた。次いで、LC 所蔵図の索引カードおよび付属索引図の調査（今回は中国・インドのみ）、および AGS 所蔵図の現物調査の結果が、一覧表とともに提示された。特に兵要地誌図に関しては、現物約 280 点を確認したほか、一枚ものとしては総数 600～750 枚程度（あるいは 1000 枚以上？）作製された見込みであること、図式としては①旧ソ連・満州、②中国大陸、③南洋諸島の 3 つに大別しうること、いわゆる「兵要地誌図」以外にも様々な種類・図式の軍事作戦地図があることなどが示された。また中国大陸の空中写真（推定 1 万分の 1）、AMS 複製の朝鮮戦争用地形図、中国・台湾・朝鮮・日本の大縮尺の地形図などの所蔵が報告されたが、これらについてはどの点が新知見かについて慎重な判断が必要であることが指摘された。

3. 小林　茂（大阪大）「アジア歴史資料センターが公開している外邦図・兵要地誌関係資料とその利用」

最近開設されたばかりのアジア歴史資料センターに、外邦図に関する非常に重要な資料があることが判明したため、その概要と今後の活用可能性に関して報告がなされた。まず、旧日本軍関係の資料の接収・返還状況について、防衛庁防衛研究所所蔵の資料なども含め、先行研究を引用しつつ紹

介がなされた。アジア歴史資料センターが所蔵するこれらの資料は、その目録と内容が電子化されたものからインターネット上でも公開されており、これらを有効に活用すれば、外邦図の作製過程なども詳細に解明される見通しが示された。同時に、近現代史・軍事史の十分な理解が，今後われわれに要求されることが指摘された。

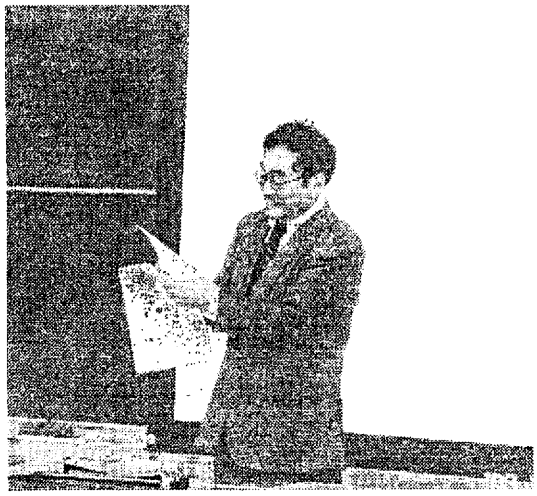

写真 14:小林による報告

4. 境田清隆・村山良之（東北大）・渡辺信孝（仙台都市総合研究機構）「東北大学所蔵の外邦図の利用状況と公開に向けての課題」

まず、国内の大学では現在最も外邦図の整理が進んでいる東北大学において、外邦図が搬入・所蔵・公開された経緯について、他大学や他施設への委譲・交換も含めて紹介された。次に、東北大学総合学術博物館に常設展示されている 14 点の外邦図についての一般利用者の感想・意見、外方図収蔵室所蔵図の閲覧・利用状況、および今後の運営上の問題点が紹介された。今後、各大学が同様な形であるいは少し別の形で、外邦図の整備・公開をすすめるにあたって、非常に参考となる報告であった。

写真 15:境田氏による発表

以上のあと、東北大学総合学術博物館の外邦図展示コーナーおよび外邦図所蔵室を見学した。

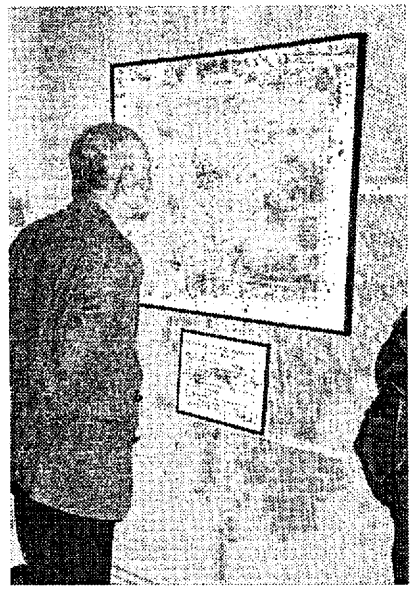

写真 16:東北大学総合博物館の外邦図展示コーナー

写真 17:東北大学所蔵外邦図の見学

このあと会場にもどり、外邦図研究グループの会合を開催した。夏以後の活動の報告を簡単におこなった。

①2002年8月　イギリス外邦図調査（長谷川）。

②2002年9月　アメリカ外邦図調査（久武・今里）。

③2002年9、11月　お茶の水女子大学所蔵の外邦図調査（渡辺・大浦[お茶の水女子大学・院]）。
調査の結果、浅井辰郎先生作製の「東半球大縮尺図総目録及び索引」（1971年、お茶の水女子大学文教育学部地理学教室）の地図枚数と現存地図枚数は一部一致しないことがあきらかになった。また東北大学の外邦図リストとお茶の水女子大学所蔵図（全167冊中38冊）を比較対照した結果、全3370図のうち1045図は重複しないことがあきらかになった。

④2002年10月　国土地理院所蔵外邦図目録（「国外地図目録」）の調査ならびに複写に関する依頼（田村）。

⑤2002年10月　大阪大学総合学術博物館設立記念展に第一書房より購入した兵要地誌図を展示（小林・今里）。

写真18:大阪大学蔵兵要地誌図を前にする梅棹忠夫国立民族学博物館顧問

⑥2002年10月　京都大学地理学談話会発表「在米外邦図の所蔵状況の一端について」（今里）。

夜は仙台市内一番町の店で懇親会を開き，境田清隆先生・岩鼻通明先生にもご参加いただき，二次会も含め，今回の研究報告内容を素材に大いに議論が盛り上がった。

（3）第2回研究会以後のおもな活動

①2002年11月　お茶の水女子大学で開催された人文地理学会大会に際し、同大学所蔵の外邦図を展示（栗原・大浦）。

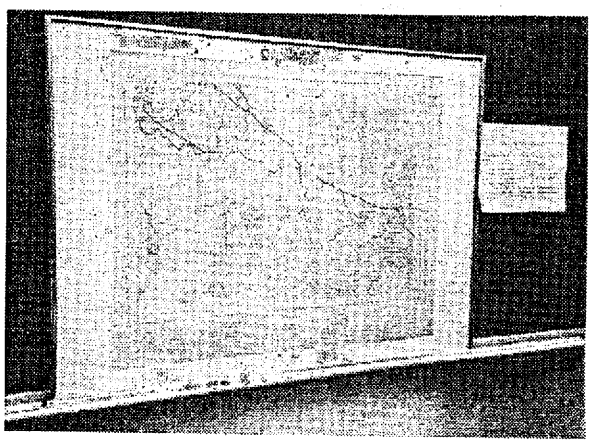

写真19:お茶の水女子大学蔵外邦図の展示

②2002年11月、12月　もと南方軍総司令部兵要地誌班の将校であった永吉敬典氏のインタビュー（源・久武・小林）。

③2003年1月　国土地理院所蔵の「国外地図目録」全4巻、「国外地図一覧図」全4巻の見学と複写許可の申請（小林）。

（文責・編集：小林　茂・今里吾之・鳴海邦匡）